Japanese Association of Educational Psychology

シンポジウム

シンポジウム I：言語発達遅滞

——その特質と問題点——

司会者　鹿取廣人　（東京大学）
話題提供者　村井潤一　（大阪教育大学）
〃　塩永淳子　（北九州総合療育センター）
〃　林部英雄　（東京学芸大学）
〃　小寺富子　（国立身体障害者リハビリテーションセンター）
指定討論者　中島　誠　（京都大学）

最近，“ことばの遅れ”を主訴として種々の関連機関を訪れる子どもたちの数が，かなり多い。このようなことばの遅れをもつ子どもたちは，その出現の頻度が高い割には，社会的にまだ十分理解されているとはいい難く，そのため種々の深刻な問題をまねきがちである。しかしその教育，訓練ないし治療法は，まだ多くの点で，模索的な状況にとどまっており，そのため言語治療の現場でも多くの注目を集めている。

一方，乳・幼児期の認知発達や言語発達に関する研究が，最近きわめて活発に行われており，その進展は目ざましい。ただしその場合，たんに通常の発達変化の様相を分析するだけでなしに，それらの障害状況における行動の特性を解明し，かつ行動に改変をもたらすための働きかけの操作を明らかにしていくことによって，発達変化を支えている条件をよりよく理解するための貴重な示唆が得られるはずである。このような観点から，一般的な発達研究の立場からも，ことばの遅れを示す子どもたちの行動の分析に，少なからず関心が寄せられてきている。

“言語発達遅滞 language retardation”ないし“言語発達遅滞児 language-delayed children”という用語が，このようなことばの遅れないしことばの遅れを示す子どもに対して，最近種々の分野で頻繁に用いられてきている。しかし，この用語自体は，きわめて曖昧であり，“予期された時期に予期された手段を用いて予期された正確さで言語行動による受・発信が発現しえない状態”をさす，一般的用語にすぎない。言語発達遅滞を字義通りにとれば，原因は何にせよ，すべてのことばの遅れが含まれることになる。しかし一般には，難聴，精神薄弱，脳性麻痺などの診断が確定し比較的ことばの遅れの原因が明らかな場合は，それぞれ当該の名称のもとで扱われる。そしてそれ以外のことばの遅れに対して，言語発達遅滞の名称が与えられる場合が多い。

しかしこの場合も，子どもの示すことばの遅れの程度，行動特徴の多様である。また原因もさまざまでかつその同定も困難であることが多い。

そこで第1に，このような言語発達遅滞という用語が，関連各分野においてそれぞれどのように用いられているか，そしてその中にはたして共通な特徴をみとめることができるかが問題となる。今回のシンポジウムでは，まず，心理学，医学，心理言語学，言語治療学などの分野において，言語発達遅滞をどのようにとらえ，かつ対象児に対してどのような働きかけを行っているのかを多角的に浮き彫りにして，その様態を明らかにし，そこに含まれる心理学的な問題をさぐり出すこと，そしてさらに，このような検討をもとにして，できれば今後の言語発達遅滞の教育・治療の発展と，言語発達・認知発達一般の理解のための示唆を得ることを目標にした。

まず心理学的立場から村井は，主としてつぎのような提案を行った。(1)言語発達遅滞ということばの概念規定は，すこぶる曖昧である。これはとくに，発達初期には診断の確定が難しいことにもよるが，そもそも研究者によって定義にかなり相違がある。そのため論議に混乱をまねいている。診断がつけにくいとき無理に定義を行うことには賛成しかねるが，少なくとも共通理解に立って議論をすすめるための枠組が必要である。(2)遅滞を決定しようとするかぎり，一般の乳・幼児の言語発達尺度がなければならぬ。しかし言語発達遅滞が問題となる乳・幼児期には，言語発達の個体差が著しく，またその成績は検査状況に依存することが多い。そのため現在までのところ有効な標準尺度はまだ見出しえない状況である。しかし言語発達遅滞を問題にするかぎり，有効な言語発達尺度の作成が必要である。(3)さらに遅滞の程度，局面を明らかにすることが必要である。とくに言語発達とのかかわりで，象徴的機能の形成の問題を，対「ひと」，および対「もの」との関係の発達と関係づけて明らかにしていくことが必要と思われる。(4)言語領域のみに遅れがみられる“単純性言語発達遅滞”の場合でも，社会性の

NII-Electronic Library Service

Japanese Association of Educational Psychology

未熟さが目立つことが多い。したがってことばの発達を問題にする場合も，言語領域のみに視点をしぼることなく，つねにパーソナリティの全体的な発達を考慮に入れておく必要がある。

塩永により医学的立場から主としてつぎのような発言がなされた。まずことばの遅れについては，(1)脳性麻痺や口蓋裂に伴う構音障害とか乞音とかのように，言語を伝達手段として用いるときに障害のあるもの，(2)精神発達遅滞や対人関係の障害とか不適切な言語環境や難聴に伴う言語発達遅滞とかのように，言語という記号体系の獲得が未確立のもの，さらに(3)以上の原因のいずれにも属さない言語発達遅滞，などに一応の分類をすることが可能である。しかし現実的には，診断や分類にこだわらずに，個々の症状をきめ細かに分析し，それに基づいて具体的な治療方針を見つけていく方が，今の所生産的であるとする。

なおそれに伴って，問題となりうる子どもの早期発見と，それに対応する早期訓練のための手法の工夫とが必要となるとして，その際の医学的な取りくみのいくつかの例があげられた。(1)脳性麻痺児に対する摂食動作を利用した口腔器官の運動学習の例，(2)難聴児に対する脳波聴検とくに，聴性脳幹反応 auditory brain stem response の利用。これにより早期からの補聴器の着用が可能となりうる。(3)多動性をもつ子どもなどへの Ritalin の服用等，薬物療法の適用例。

林部によると，言語学ないし心理言語学の立場からの言語発達遅滞に関する研究は，健常児の言語発達の研究に比して，数が乏しい。これは，言語発達遅滞の程度，種類がさまざまであり，またその原因も多様であり，条件の統制が難しく明確な結論が得がたいこと，心理言語学の研究の歴史が浅く，研究者の多くが，基本的な問題としてもっぱら健常児の言語発達の研究に焦点が合わされていること，などの理由によるとしている。そしてさらに彼は，聴覚障害児の言語発達についての自らの実験的研究を引用して，聴覚障害児の言語発達が，健常児のそれに比べて数年の遅れがあるが，大まかな発達の経過は変らないこと，ただし健常児では発達初期になされている二重格制約の習得や自―他動詞の弁別が，聴覚障害児では困難であること，そしてこれは言語発達早期に聴覚的情報が不十分のためであると想定されること，さらに以上の研究をもとに，言語発達を，規則の習得として把え，これを一種の“仮説―修正過程”とよび，言語発達遅滞の教育・治療も，このような観点から行われることの必要性を指摘した。

さらに，言語治療学の立場から小寺は，言語治療の現場における臨床的なアプローチに伴って生じるいくつかの問題点を指摘した。すなわちことばの遅れを示す子どもたちの中で聴覚障害によるそれは，研究と実践の歴史も長く，かつ言語治療のシステムもかなりの程度確立しているといってよい。一方とくに言語発達の阻害が，主として中枢性の要因に帰すると考えられる事例は，現場での対応策は未確立で多くの未知の問題が含まれ，そのため対象児および家族が深刻な状況におかれている。そしてそのような事例には，言語発達を理解するための重要ないくつかの示唆が含まれるとして，そのような事例に対する単語学習，語連鎖学習の手法や経過についての具体例を提出した。そしてその場合，言語学習を効果的にすすめるには，たんなる対連合的反復ではなしに，記号―指示物関係の成立を目ざして，初歩的な対人関係の成立を足がかりにして事物の操作の分化を促進し，かつ子どもの行動体制の水準に合わせた記号系の導入を行うべきこと，遅延反応の状況などを適宜利用して，象徴機能の形成，促進をはかるべきこと，などが強調された。さらに，言語発達遅滞の分類に関して，現在のところ年齢基準やその要因から分類するよりも，具体的な言語治療の働きかけないし訓練目標設定との関連から，分類を行った方がより生産的として1つの試案を提出した。それによると，非言語的手段による交信事態への参加の良し悪しにかかわらず，(1)音声言語による事物の名称の理解が困難なもの(2)，音声言語の理解は可能だが，音声言語の産生が困難なもの，さらに(3)言語の諸側面の発達に不均衡はないが言語発達の水準が健常児に比して低いもので，かつそれらの中から(4)聴覚障害を除いたものを，さし当り言語発達遅滞として扱っていこうとする。

以上の各話題提供者の発言内容はかなり多岐にわたり，かつ“言語発達遅滞”の名のもとに取りあげられた対象もさまざまである。そのことは，まさに村井が指摘するように，言語発達遅滞の定義が研究者によって異なるという事実を示していると同時に，その様態の多様性を反映していると考えてよい。

しかし指定討論者中島（誠）は，なおその中にも，正常の言語発達の問題と関連して重要な共通点のあることを指摘する。すなわち，ことばの発達は，まさにそれだけの発達ではなくそれを支えている基盤がありうる。その場合(1)発声・調音・聴覚機構の発達とならんで，(2)親との情動的かかわりの発達と，(3)感覚運動的シェマをもとにした認知の発達とが重要な関連をもち，それらの働きあいを通じて“意味するもの”と“意味されるもの”が分化し，象徴機能の形成が行われて，言語音声の体制化・記号化の発達がなされていく。そしてこれらの機能の相互的な関連は，言語発達遅滞児との教育的かかわりを通じて，はじめて浮き彫りにされてくるのである。

NII-Electronic Library Service

Japanese Association of Educational Psychology

以上の論議をふまえた上で，具体的な資料を提供した話題提供者との間に以下のような諸点について討議が行われた。

(1)自閉的傾向，多種性傾向，さらには微小脳障害 MBD といわれるものの機制の解明に対してもつ薬物療法の意義，もしくはその可能性と限界。(2)脳性麻痺児の吸啜運動を利用した早期訓練の効果とそれが子どもの対人関係，認知発達に対して及ぼす効果。その効果のポジティブな側面とネガティブな側面との関係。(3)従来の言語訓練で用いられる対連合的ラベリングの学習のもつ意味，限界。その場合子どもの対事物関係の行動の分化に即した素材と信号系の提示がクリティカルな意味をもつ。(4)年少健常児では可能でも，難聴児ではかなり年長になっても乗り越ええぬ壁が存在すること。現在の所，それが何によるか同定しえぬが，その分析をすすめていくことによって，言語発達における段階が明確化する可能性がある。

さらに以上の討議に加えて，言語発達遅滞の概念について，関連問題を取りあげるからには，当該研究者は，その用語を科学的に明確に定義するよう努めていく義務があることが指摘された。しかし一方現段階では，それらの定義を十分整理するまでには至っていないこと，したがって，その概念の明確化を目標にすえながら，単に分類・診断のための定義を早急につくり上げるのではなしに，子どもたちに働きかけを行っていく道程の中で，訓練目標設定と関連づけつつ概念を次第に精練していくことが，現在の所より稔り多いと考えられること，などが論議された。

なお，中島（昭美――水産大）より，以上のような言語発達遅滞の教育において，人間行動の自発性とその組織化における触運動機能の意味，および記号操作における形の弁別，分解，組み立ての働きの意味について，指摘する発言があったが，本シンポジウムではそれらの問題については十分取りあげられるに至らなかった。

本シンポジウムでは“言語発達遅滞”について，討論を通じて明確な定義を得ようとする意図ははじめからなかった。むしろ各分野からの話題提供者によって，その用語のもつ曖昧性と様態の多様性が明らかになり，同時に言語発達にまつわる問題の難しさが再認識されれば意図の１つは達成されたことになる。そしてさらに，“言語発達遅滞”の問題がたんに“言語”だけの問題ではなく，子どもの全人格が関連した問題であること，そしてこの問題を解いていくには，これらの子どもたちとの実践的かかわりを通じるより他にはないということが明らかにされていれば，本シンポジウムのもう１つの意図も，多少は達成されたことになる（文責・鹿取）。

シンポジウムII：「教育心理学研究における倫理の問題をどう考えるか」

司　会　者　小嶋　秀夫　（名古屋大学）
話題提供者　清水御代明　（奈良女子大学）
　　冨安　芳和　（愛知県心身障害者コロニー）
　　原岡　一馬　（佐賀大学）

1.　シンポジウムのねらい（小嶋）

教育心理学における倫理問題は，①被験者・参加者の取扱い，②職業倫理，③科学の社会に対する責任の３つの問題に大別できよう。これらの問題はわが国でも過去に取り上げられており，教科書，講座もの，レヴューなどの中で，部分的にでも倫理問題に触れたものは少なくない。しかし，それらの多くは抽象的な論議をしたもので，しかも相互に議論を戦わせるようなものには至らなかった。なかでも，被験者・参加者の取扱いという具体的問題と結び付いた原理を組織的に論じるものはなかった。

そこで今回のシンポジウムは，第１の問題に焦点を合わせ議論を進めることにする。もち論，その背後には常にあとの２つの問題があり，また，それは人間観や価値観とも関係し，哲学・宗教・法律・社会制度を初めとする広い領域の問題と結び付いている。教育心理学の研究に携わる個々の研究者が，倫理問題の多面性・奥深さに敏感になり，責任ある倫理的決定をするための基礎となる原理を自己の内に形成するには，どのような手だてが必要なのであろうか。今回のシンポジウムは，その検討のための第一歩であって，まず教育心理学の研究者集団の内部で，率直な意見交換をすることに主たる目的が置かれる。学術会議による「科学者憲章」の声明が出，またこの22回総会でも，倫理の問題への言及がいくつかの場所で行われているので，この企画は時宜に適したものであろう。

このシンポジウムのきっかけの１つは，清水（1972，幼児研究の方法）に対する小嶋（1975，児童心理学の進歩）の疑問であった。それは SRCD の基準に刺激され

NII-Electronic Library Service

Japanese Association of Educational Psychology

ON THE TRAINING PROGRAM FOR THE FORMATION OF LINGUISTIC COMPETENCE OF SENTENCE PRODUCTION WITH VERB-PREDICATE CONSTRUCTION IN MODERATELY MENTALLY RETARDED CHILDREN

Kiyoshi Amano
(National Institute for Educational Research)

For the purpose of formation of linguistic competence in mentally retarded children, able to produce sentences with verbpredicate construction, 6 moderately mentally retarded children (the age range being from 7 years and five months old to nine years and nine months old, and five of them had Downs' syndrome), who had stayed at the latter stage of single words, and had still failed to produse sentences with syntactic construction, even though they had acquired comparatively many words, were trained under the following 4 stageconstructed training program : 1) formation of concrete material action with objects, 2) construction of sentences on the base of kinematic linear scheme of sentence, 3) construction of sentences on spatial linear scheme of sentence, 4) construction of sentences on the inner speech (mental linear scheme of sentence). As training material, sentences of Agent-Action and Agent-Object-Action construction were used.

As their learning abilities had been extremmely low, training with them lasted for over 8 months and they underwent training of 30–40 sessions during that period. As a result, the generalized competence, enough to produce the sentences with abovementioned constructions, was achieved in five children. And their acquired competence was proved to be generalized and transferable to their learning of sentences of other construction. Analysis of the effect of the training on the progress of sentence comprehension resulted in their abilities of sentence comprehension markedly developed with the progress of competence of sentence production, except with one child, who seemed to have had some disturbance in linguistic memory.

SYMPOSIUM I

LANGUAGE RETARDATION

——Its Characteristics And Problems.

Chairman : Hiroto Katori (University of Tokyo)
Speakers : Junichi Murai (Osaka University of Education)
Junko Shionaga (The Center of Developmental Medicine and Education in Kitakyushu City)
Hideo Hayashibe (Tokyo Gakugei University)
Tomiko Kodera (National Rehabilitation Center for the Disabled)
Discussant : Sei Nakajima (Kyoto University)

The purpose of this symposium was to clarify how the term, "language retardation", was understood in various fields, such as psychology, medicine, psycholinguistics and speech pathology, and how the "language-retarded children" were treated in their fields, respectively. Through discussions, manysided characteristics of the language-retarded children were emphasized some suggestions for understanding development of cognition and language were made.

J. Murai, a psychologist, pointed out that the term, "language retardation", was differently used by each researcher relevant to the subject, and that a clear definition of it was needed to obtain a

NII-Electronic Library Service

Japanese Association of Educational Psychology

comon framework while discussing these problems. He argued that it was necessary to invent an effective normative scale for language development. He also emphasized that the formation of symbolic function was important for language development and that speech therapy was needed to understand the development of the whole personality.

J. Shionaga, a medical clinician, indicated that from the practical standpoint, it was more productive to analyze each symptom of cases in details and to seek concrete methods for treatment than to stick to the formal diagnoses and classifications. She also emphasized the importance of an early examination and training, and she presented some examples : motor learning of sucking movements in early infants of cerebral palsy, auditory brain stem responses, and some drug treatments.

According to H. Hayashibe, there were few researches on language retardation on a psycholinguistic approach. On the base of his analysis of language development in hearingimpaired children, he suggested that language development would be genrally equivalent to acquirement of rules, and that the process of this acquirement be a kind of "hypothesis-correction process". He pointed out that the education and treatment on language-retarded children should be performed, in consideration with the characteristics of this process.

T. Kodera, speech pathologist, insisted that learning on the formation of symbolic functions, considering the signreferent relationship, was more critical than paired-association learning actually prevailingly in speech therapy. She indicated that at the present it should be more practical and productive to classify language retardation in relation to the concrete treatments or to the settings of the training goals for each case than in relation to the etiology.

S. NaKajima, as a discussant, pointed out that through the presentations of these four speeches a common characteristic of language development could be found ; the language development should be closely related to the development of other aspects, such as cognitive process and interpersonal relationship. And he pointed out that we should not only take into account the development of phonation, articulation and auditory mechanism, but also the emotional relationship to parents, togetler with its cognitive process.

Furthermore, the following problems were discussed : (1)the significance of drug treatments in understanding mechanisms of autistic and hyperactive disposition as well as of minimal brain dysfunction, (2)the influence of the early training which uses sucking movements in cerebral palsied infants on the development of personal relationship and cognitive processes, (3)the limitation of paired association learning in language training, (4)the characteristics of the barrier to syntactic operations in hearing-impaired children. Finally, some comments were made on the necessary conditions for a clear definition of the term, "language retardation".

SYMPOSIUM II

HOW SHOULD THE EHICAL ISSUES BE CONCEIVED IN RESEARCH IN EDUCATIONAL PSYCHOLOGY?

Organizer and Chairman : Hideo Kojima (Nagoya University)
Speakers : Miyoaki Shimizu (Nara Women's University)
Yoshikazu Tomiyasu (Aichi Prefectural Colony)
Kazuma Haraoka (Saga University)

This was the first formal symposium on ethical issues in psychological research in Japan. Ethical issues in research usually consist of (1) treatment of human subjects or participants, (2) professional ethics, and (3) responsibility of science to society. The present symposium dealt mainly with the first issue, but certainly in connection with the other two.

NII-Electronic Library Service